

偉大なマエストロ小澤征爾へ

コメントまとめ編集部／中東生／小林伸太郎／三光洋／中村真人



ラデク・バボラーク

(指揮者、ホルン奏者)

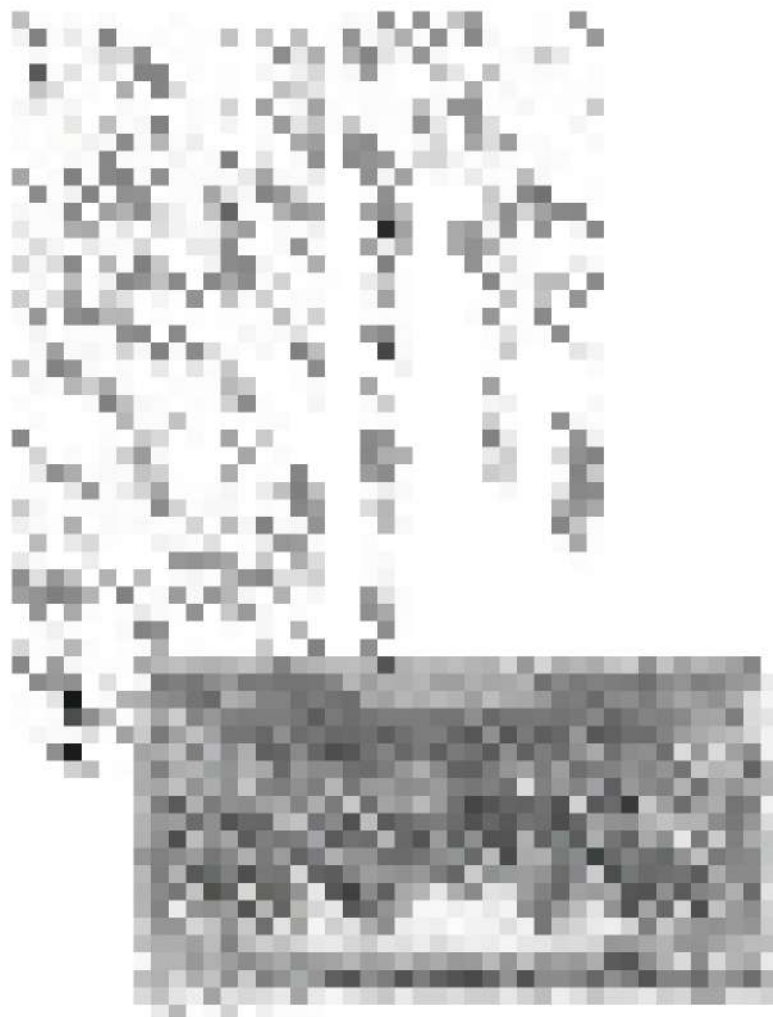
Radek Baborák

長野オリンピックの開会式に招かれてマエストロ小澤の指揮で《歓喜の歌》(ベートーヴェン《第九》)を演奏して以来26年間、小澤音楽ファミリーの一員でいられて幸せでした。ホルン奏者として、彼の指揮でモーツァルトの協奏曲全曲を録音したほか、彼の代役も任され、アシスタントとしても直筆の注意書き入りスコアから多くの事を学びました。

彼は偉大な音楽家としてだけでなく、目標を貫き、人間性で世界をつないだ彼の遺産を、彼を知るすべての人に残すでしょう。



© 大窪道治



与えていました。

フィリップ・ジョルダン

(指揮者) ウィーン国立歌劇場音楽総監督
Philippe Jordan

小澤征爾のような芸術家は残念ながら非常に稀で、気取らず、親しみやすく、気難しくなく、名誉欲とは無縁で、ただ自分と他人を独特の音楽的宇宙に近付ける使命に全力を尽くした。彼の指揮はエネルギー、集中した緊張感、活気が特徴だ。礼儀正しく、ていねいで、賢く、常に友好的で、頼りがいがあり、非常にユーモアにあふれ、控えめですらあった彼はすべての人を音楽への愛で包み込む。みなを彼を好きになり、彼から学んで豊かな人間になれるのだ。



© Michael Pöhn / Wiener Staatsoper

児玉 宏

(指揮者)
Hiroshi Kodama

中学生のとき「武者修行」で小澤さんと出会い、外国・ヨーロッパの存在が初めて自分のなかに定着しました。後輩として桐朋卒業後、「修行」にならってザルツブルクからドイツへ。1975年秋、ベルリン・フィルとのマラー「交響曲第8番」で小澤さんに再会、発奮させられました。ドイツ語には、musizieren という動詞があります。彼の「武者修行」は、音楽を動詞にし、自分の人生を音楽に浄化変容することだった気がします。



ケント・ナガノ

(指揮者)

Kent Nagano

小澤さんは類稀な指揮者、かつ偉大な人生の先生でした。戦後の米国で家も没収された日系人の私のコンプレックスは、小澤さんがサンフランシスコ交響楽団ですばらしい音楽に国境がないことを証明し、解消されたのです。初めて聴いたベートーヴェンもチャイコフスキーも小澤さんの指揮でした。その後メシアン作品の世界初演時、小澤さんの助手に任命されてから、指揮以外にも結婚観や自分の表現法も学んだので、いまでも感謝に絶えません。

アンドリス・ネルソンス

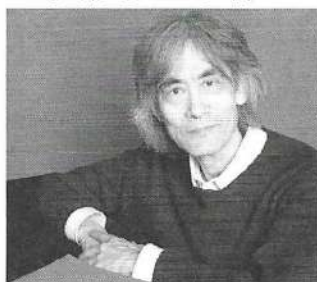
(指揮者・ボストン交響楽団音楽監督、ライブツィヒ・ゲヴァントハウ
ス管弦楽団カペルマイスター)

Andris Nelsons

ラトヴィアで育った私にとって、セイジの音楽的統率力と交響曲、オペラ両方における演奏はすばらしいインスピレーションの素でした。ボストン交響楽団との録音は数世紀にわたる音



2013年、ボストン・シンフォニーホールバックステージで
©Marco Borggreve



© Sergio Veranes Studio

楽形式とジャンルを網羅しており、私が最も深く感銘を受けたものの一つでした。その後同楽団の音楽監督に就任してからは、30年近くもの間に彼が与えたなみ外れた影響を痛感するようになりました。彼の大きな心と人間性、穏やかな優しさがとても恋しいです。

イレナ・ネメチエク

(コンサート・エージェント)

Irena Nemecek

サイトウ・キネン・オーケストラとウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のツアーをオーガナイズして同行したので、たくさんすばらしい個人的な思い出があふれています。彼がもう私たちと共にいないのは辛いですが、彼の音楽と生きる喜びは永遠に残っていくことでしょう。現在はラデク・パボラークのマネジメントも担当していますが、彼にとってもとても大きなインスピレーションの源でした。そしてこれから先もそれは続いていくことでしょう。



1994年6月、ウィーン・フィルのラヴェンナ・ツアーの公演後の食事会で、当時のウィーン・フィルのトップ、ヴァルター・プロフスキーと

リディア・トイシャー

(ソプラノ歌手)

Lydia Teuscher

小澤氏は最もカリスマ的魅力的な指揮者でした。小さな動き一つですべてを細やかに指揮し、すごいエネルギーを発するのです。初めてケルビーノを歌ったときから、彼のオーラと親切さ、肯定しながらも欲する音が出るまで妥協しない姿に魅了されました。日本に招ばれるたび、極力、子供用の演奏会にも行きました。彼は子供たちが音楽に触れる機会を大切にしていました。

音楽界にとって彼の喪失は大きいですが、すばらしい記憶は残るでしょう。



小澤の左隣がトイシャー

釣アンナ

(演出家)

Anna Tsuri

20年程前、ウィーン国立歌劇場で毎日のように会え、ほぼ毎回小澤先生の本番を舞台袖で拝聴した事を昨日のように思い出します。当時のウィーンは「アジア人に西洋音楽が解るか」という目に見えない空気が凄かったのですが、それに動じず果敢に活動される先生を近くで見させてもらって頭の下がる思いでした。最近ではアジア人にとってもクラシック界で活動がしやすくなっていますが、それを築かれたバイオニアが小澤征爾さんでした。



左端、釣アンナ氏 © 釣アンナ

クリスティアン・ツィメルマン

(ピアニスト)

Krystian Zimerman

1982年、ベルリン・フィル創立100周年記念コンサートで共演してから40年以上の間に、30回ほど共演しましたが、常にソリストに神経を集中させて全員で音楽を作っていく小澤さんの指揮は常に心地よく、私にとってかけがえのない宝物です。音楽に対してひたむきでレバトリリーになかった曲でも暗譜で振り、内面的理解を深めたうえで、正直な直感を共有させる才覚があるからこそ、明快で自然な音楽が生まれるということを学びました。

